

武蔵野日曜集会

愛の力

—— ロマ書第13章 ——

1978年11月26日(武蔵野)

小池辰雄

聖霊の権威 愛を負う 愛とは人助けをすること 神の愛 聖霊の内住の世界 愛とは死からの救い もう終りが近いから 獅子と狼と豹 アウグスティヌスの『懺悔録』 キリストを受けとって栄光を表したか

【ロマ13・1〜14】

1 凡ての人、上にある権威に服うべし。そは神によらぬ権威なく、あらゆる権威は神によりて立てらる。2 この故に権威にさからう者は神の定めに従るなり、悖る者は自らその審判を招かん。3 長たる者は善き業の懼にあらざ、悪しき業の懼れなり、なんじ権威を懼れざらんとするか、善をなせ、然らば彼より誉れを得ん。4 かかれは汝を益せんための神の役者なり、然れど悪をなさば懼れよ、彼は徒らに剣をおびず、神の役者にして悪をなす者に怒りをもて報ゆるなり。5 然れば服わざるべからず、ただに怒りの為のみならず、良心のためなり。6 また之がために汝ら貢を納む、彼らは神の仕人にして此の職に励むなり。7 汝等その負債をおのおのに償え、貢を受くべき者に貢をおさめ、税を受くべき者に税をおさめ、畏るべき者をおそれ、尊ぶべき者をとらうとべ。

8 汝等たがいに愛を負うのほか何をも人に負うな。人を愛する者は、律法を全うするなり。9 それ『姦淫する勿れ、殺すなかれ、盗むなかれ、貪るなかれ』と云えるこの他なお誠命ありとも『おのれの如く隣を愛すべし』という言の中にみな籠るなり。10 愛は隣を害わず、この故に愛は律法の完全なり。11 なんじら時を知る故に、いよいよ然なすべし。今は眠りより覚むべき時なり。始めて信ぜし時よりも今は我らの救い近ければなり。12 夜ふけて日近づきぬ、然れば我ら暗黒の業をすてて光明の甲を著るべし。13 昼のごとく正しく歩みて宴楽・酔酒に、淫楽・好色に、争闘・嫉妬に歩むべきに非ず。14 ただ汝ら主イエス・キリストを衣よ、肉の欲のために備えすな。



● 聖霊の権威

1 凡ての人、上にある権威に服うべし。そは神によらぬ権威なく、あらゆる権威は神によりて立てらる。

これは原則はそうですね。原則はそうなんです、いわゆる政治的な権力が、「神によりて立てられる」なんてのは現実には合わないわけです。パウロはユダヤの神政、王が神さまの代理として治めるといふ——ダビデの場合はそういうわけでしょうけれども——そういったあるべき姿から演繹的に言っているのですね、本来はそういうものだと。だから、この地上の権威を持たせられている者はその自覚がなければならぬ。そうであるならば、普通の庶民はそれに従うというのが本当のすじであると。そういうすじ論ですね。本質論。そこから大乗的に言っているわけです。今の人がこれを読んだらすぐ、これは非常に封建的なことだと。また、これを盾にして封建的な権力をはたらいたら、これはとんでもないことになる。歴史上、いろいろそういう例もありましたよけれども。

2 この故に権威にさからう者は神の定め^{もと}に悖るなり、悖る者は自らその審判^{さばき}を招かん。

神の審判を招くと。

「キリストは学者のごとくならず、権威あるものらしく語った」

とありますね。キリストは全く神の権威を持っていた。

本当の為政者で、その精神を持っていたような人たちはやはり偉大なる王者と言われることになりました。フレデリック大王(プロイセン王、在位1740〜1786)なんていうのはかなりその意識のあった人です。権威があるということは逆に本当に僕の姿を、

「自分は国家の第一の僕である」

と、フレデリック大王はそういう意識を持っていた。

キリストも神の僕である。即ち、神の前に本当に平伏す人が本当の神の権威をいただくのであって、神に平伏さない者は権威を行使する資格がありません。だから、この僕の意識、これが土台です。これはなにも為政者に限らず、すべて上に立つ人はそのような底の意識を持っていなければ、権威というのは恐ろしいものです。ところが、そういった僕の自覚を持つような権威者というのは非常に少ないわけです。明治天皇は権威のある天皇でありましたが、やはり非常に低い気持ちを一面持つていらつしやつた、思いやりの深い天皇であった。

そういう角度からこのパウロの言葉は、権威の奥に僕の自覚ということが極めて大事だということ。どうも註解書にはそこまで書いてないようですね、パウロがそこまでちよつと一言、言っておいてくれたらよかったです。

3 長^{おほ}たる者は善^よき業^{わざ}の懼^{おそ}れに^{おそ}れならず、悪^{わる}しき業^{わざ}の懼^{おそ}れなり、

「悪しき業の人の懼れなり」ということです。



なんじ権威を懼れざらんとするか、善をなせ、

権威は勸善懲悪のかぎを握っていますから、それで、「善をなせ」と。

然らば彼より誉れを得ん。

まあ、常識的な言葉で言ってますけれども。「誉れを得るから善をなせ」ではもちろんない。

4 かれは汝を益せんための神の役者なり、然れど悪をなさば懼れよ、彼は徒らに劍をおびず、神の役者にして悪をなす者に怒りをもて報ゆるなり。

そういったような意味における権威の一面を言っているわけです。

5 然れば服したがわざるべからず、ただに怒りの為のみならず、良心のためなり。

良心の問題として従わなくてはならないと。もうひとつ突っ込んで言うと、キリストの場合をいつも思えばいいわけなんで、キリストはなぜ本当に神の権威を持てたかということ、彼には聖霊が来てたからです。この聖霊が——正直、我々も体験して分かるんですけれど——聖霊によつて、聖なる霊によつて、何かしらんけれども本当の落ち着き、本当の権威というものがある。「であろう」でなくて、ハッキリとそれが断定的に言えるわけです。それは絶対に我々の側の主観ではありません。主観でいわゆる確信でものを言ってたって、人間的な確信なんてものは当てにならない。自分を本当に投げ出した平伏しのところに聖霊の権威が来ますから。

学問の権威という言葉はありますが、学問は学問としてのもちろん権威はありますよ。その学問の真理にもいろいろな角度の質の真理がありますけれども。しかし、それは本当に学者が、自分が間違つたと思つたら、すぐそれを訂正する。それだけの気持ちを持たなかつたらば、また、学問も自分の説の意地をはるようなことになつたら、とんでもないことになります。要するに、真理を持つところの権威です。しかし、真理の真理はこの神の聖霊によるところのものですから。

●愛を負う

6 また之がために汝ら貢を納む、

租税ですね。

彼らは神の仕人にして此の職に励むなり。

「カエサルのはカエサルに返せ。神のものは神に」

という自覚を、パウロはここで言っているわけです。税金も本当は互いに助け合うためのものなのであつて、それを権威の、いわゆる政治的に、政権を持つ者がたつぷり使うわけには本当はいかないわけだ。それが現実にはいろいろな割り切れない面がたくさんあるようですけれども。

7 汝等その負債をおのおのに償え、貢を受くべき者に貢をおさめ、税を受くべき者に税をおさめ、畏るべき者をおそれ、尊ぶべき者をこつとべ。



パウロという人は非常に、根底的に福音を掴んでいるその角度から、みんなに分かるように、常識的な第二義的な方面の真理もそのようにして語っているわけです。現実を離れていないですね、パウロという人は。

パウロの福音の構造というのは、個人の在り方というものがローマ書12章ほど完璧に語られたところはおそらくない。12章は、キリスト者個人の在り方がいかにあるべきかという、もうこれは完璧な答案ですね。13章になると、社会的なまた国家的な、生活における庶民の義務という——権威者の側のことは語っていないけれども——その義務として、かくあるべしというところを言っているわけです。権威者が権威者らしくない在り方をすれば、それに対しては真理をもって戦うことも、もちろんありえます。そのことに対しては別にここで言及していませんけれども。そういうところを読み違えをしないように。「パウロはただ無条件にこう言っている」というふうにとってしまったのでは、それはもちろん大きな間違いになります。

まあしかしながら、暴力革命はいかんです、どう考えても。政治にはいろいろな間違いがありますけれども。どのような場合にも、剣をとることは、武器をとることは人殺しという結果を生じます。何といても、殺人というのは桁違いに悪い罪ですから。また、権威者がそういった殺人的なことをすることは、へたするといくらかでも歴史にはある。へたするところではない、もう大いにあつたわけです。とんでもないはなしだ。あれはもうみんな地獄行きだ。

8 汝等たがい愛を負うのほか何を人に負うな。人を愛する者は、律法を全うするなり。

この8節は非常に大事な節です。「愛を負う」という。愛せられて、それに対してまた愛をもって答える。単なる義務ではない。義務というような言い方をする人もありますけれども。

「互いにあい愛せよ。これ新しき戒めである」

と、キリストがヨハネ伝で言われているとおりです。「愛する」というと、ただ感情的に愛するように思つては、それは大間違いです。いつも申し上げているとおり、人助けをすることが愛することなので、現実にも人助けをしないことは本当の意味の愛ではない。人を担う、助ける、救う、これが愛です。

「人を愛する者は、律法を全うするなり」

というのは、ギリシア語の原文では、

「人を愛する者は、律法を全うしたるなり」

と、完了形で書いてある。他人を——隣人と言つてもいいですが、誰でも隣人です。要するに、でつくわす人はみんな隣人。だから、万人を——でつくわす人を本当に思いやる。ただ心で思いやるのではなくて、行為をもって。これは「律法を全うする」と。「律法を満



たす」という意味です。「全うする」とは「満たす」「プレローマ」という言葉です。「律法」はモーセの十誡以下たくさんあるわけですが。それは要するに、

「神を愛するということと隣人を愛すること、その二つに尽きる。その二つも実は一つだ」

とキリストが言われたとおりです。福音書に、四か所に出ていますから。また孔子も結局、「じん盡きるところは仁だ」

と。孔子でも孟子でも言っていますね。仏教では「慈悲」。キリスト教では「愛」。みんな共通しています。結局もう最後のところはそれなんです。

●愛とは人助けをすること

動物でもそうですよ。こういう話がある。鶴が南から北へ渡っていく。あるとき、空を渡る鶴の群れに鷹が襲ってきて、一羽の鶴を捕まえてしまった。そうすると、群れの他の鶴がその鷹に襲いかかって、その捕まった鶴を助けた。しかし、鷹に捕まって傷付いた鶴がだんだん遅れて怪しくなった。それを見た他の二羽の鶴がその遅れてくる鶴の翼の両側にやって来て、その翼と翼を重ねて、そこに鶴を乗せてずっと飛んで行ったという。いかに動物の世界も、一羽の鶴が襲われた時にみんなでそれを助ける。実にうるわしいことで、へたすると、人間の世界にそれだけのことがあるかというようなわけです。

ツルゲーネフが狩りをしていて、親鳥が小鳥を助けるために上から降りてきたので、自分は何も止めないという話がありますね。私も『芸術の魂』（著作集第二巻）でゲーテの言葉を引用したところがあったでしょ。

「これはエッカーマンがある親鳥に対する愛の事実を語ったときに、ゲーテの『神と世界』詩集の『プロエミオン』（序詞）から引用された詩句であるが、ゲーテは更にこう言った、「神が、もし鳥のたましいにその雛鳥に対する全能的本能を与えておらず、また同じ本能が全自然の生きとし生けるものに与えていないとするなら、

「本能」というのは愛です。

この世界は存続しえないであろう！けれども、神の力はあまね普くゆきわたっており、永遠の愛はいたるところに作用している。（1831・5・29）」（第二巻367頁）

ゲーテという人は自然界における神の愛の姿を自然の現象で見ている人です。ゲーテという人は「アガペー」というようなことをただ観念的に言っているのではなくて、現実にもいろいろな姿を見て、それは要するに神の愛のいろいろな現れ方だと。恋愛にしてもそうです。非常に大きな角度からものを見ている。結局、帰するところは、

「神から出て、神に帰る」

とありましたね。そういう大きな角度からものを見て、自然界の法則の奥に愛の姿を見て



いる。ダンテも『神曲』の最後はそういう言葉で結んでいます。もちろん、間違った愛もありますけれども。それは現れ方が間違ったので、本来は神から来ているんだということをお忘れないようにしていただきたい。

愛とは人助けをすること。また、人に限らない。動物でも何でも、植物でも。そういうものに対する憐れみの気持ち、思いやりの心、それから発するところの行為です。プロテスタントでは、行為のことをあまり言わなすぎますけれども。我々、使徒的信仰は、霊の世界からは口に発しては言葉となり、手足に発しては行となる。だから、言と行とは実は同じところから発しているのです。「言うは易く行いは難し」なんて、そういう切った考え方をしたらダメだ。本当の信という、信仰の信の世界、それは言わざるを得ない、告白せざるを得ない、また、行為に現れざるを得ない。どんなにそれが惨めなものであっても、ここから出ていけば本ものだとということです。

どんなに立派に見えても、ここから出ていなければダメ、それはうそもものだ。それはキリストが言った「偽善」というんです。信から出ているものが本当の言であり、行である。そうでないものは、どんなに立派でも偽善である。信から出ているものは、どんなに惨めな惨憺たる姿であつても、それは本当だ。そういう在り方は、今のプロテスタント信仰は足りない。私はただカトリックをいいと言っているのではない。カトリックはまた別の角度から行を言いつぎている面がありますけれども。結果の方ばかり考えてしまう。

結果は考えなくていい。現象していく。根源の現実が本ものなら、現象せざるを得ない。太陽はもの凄いい熱をもつて光を発しているから、我々はこうやってみんな太陽の光によつてものを見たり、また暖められたり、地球は引っ張り回されたり、ということですよ。

私は今日の題に「愛の力」と書いたが、太陽というものは本当に物理界における愛の力ですよ。ゲエテという人は、そういう意味で太陽を見ていた。だから、

「太陽に対しては私は無条件に頭を下げる」

と言った。愉快だね。今の人はそれだけのことを言えない。

「キリストに対して私は無条件に頭を下げる。太陽に対しても同じく無条件に頭を下げる」

と。これはゲエテが死ぬ十日前くらいの最期の言葉ですよ。みんな、「ゲエテ、ゲエテ」なんて言うけれども、彼の魂の本当の姿を果たして見ているかと言いたくなる。それは外からは見えない。その同じ境地に自分の心が入っていかなければ。

●神の愛

それで、「律法のプレローマである」という。あるいはもうひとつ別な言葉でいうと、ドイツ語でいえば、「アウフヘーベン」(aufheben)と言いたいところです。即ち、律法を満たして、律法を廃止してしまう。律法を満たして、もう律法の世界からは超越してしまう。



それをドイツ語で「アウフヘーベン」と言う。「止揚^{しやう}」なんて妙な訳し方をしているけれども。やっぱり、哲学上の言葉だから。あるいは、律法の「テロス」、「終末」、「終極」である。目的を果してしまった。それは「テロス」という言い方になる。「プレローマ」(満たし)でもあり、「テロス」(終り)でもある。アルファにしてオメガなりと。

だから、モーセの十誡を、愛は全部これを掌握^{しやうあく}する。神の愛が来ていると、これはみんな成就できる。人間は現実には、これはできませんよ、なかなか。できませんけれども、ここに来ていけば、本質的にはそれを満たし得る力を持っている。これがなかったらあぶない。「神の愛」と言ったら、それはキリストです。我々は直接に神に行くわけにいかない。キリストの十字架で贖われたから。キリストは、

「私が、十字架でお前の我執というやつは全部外してやった」

と。我執というのが、自分に執するエゴイズム、これが人間の罪ですから。エゴイズムから外されななんです、人間は。どうにもならん。東西古今の宗教家みんなこの問題でぶつかって、そして、苦しんで突破したんでしょ。キリストでも、彼は地上に居たときには手放して居たのではない。いつも、

「汝の意^{こころ}を」

と言って、自分を捨てていた。だから、私は、「私が無い」から「無者」と申し上げているわけです。

「キリストは無者である」

というのはそういうことです。無私者、私心の無いひと。ということとは、「汝(神)」ばかりを問題にしている。

「あなたの意志、あなたの愛、あなたの力、あなたの言葉」

と。全部そこから来ている。だから、無即無限無量な内容になっている。正に、プレローマなんです。充滿している。愛ばかりではない。神の知恵も力も義も一切が愛という言葉の中に入ってしまう。神の一切はキリストにおいて充滿している。

福音書のキリストを見て、そこで神を見なかつたら、どんなに神さまのことを言ったってダメだ。もうハッキリしている。だから、福音書のキリストにぶつかって、降参して、「参りました!」と言って、キリストの前にぶつ倒れてごらん。そうしたら、キリストの中に入るから。

それはもう既に、この十字架で我々はぶつ倒されているんだから。

「なかなか、私はぶつ倒れません」

ではありませんよ。もうここに、十字架で私たちはもう片がついているんだから、現在も過去も未来も。片がついているところにウワーツと来るのが、これが聖霊ですから。もう私はあなた方と語りながら、その世界に入っているんです。もうやりきれんですよ。御霊は何ものとも代えることができない。



だから、それが愛の力となる。聖霊の愛の力です。キリストの愛の力がやって来るから。まあ、ゲートルはそこまでキリストのことを言わなかったのが、彼の残念なところですね。でもね。

「神らしきは、宇宙をみふところの中に動かし、自然をおのが内に、おのれを自然の内に愛護すること。

されば、神の中に生き、動き、また在るものは、

神の力、神の霊を失うこと絶えてなし。」(私訳)

「神の中に生き、動き、また在る」という、このゲートルの言葉はもちろんパウロが使ったあの言葉からきている。我々にとっては、「神のうちに生き動きまた在る」ということは、

「キリストのうちに生き動きまた在る」ということ。

「キリストと神と聖霊は離すことはできませんから。」

「神の力、神の霊を失うこと絶えてなし」

そうだったら、「神の力、神の霊を失うこと絶えてなし」と。これだけのことを言えるゲートルは確かにそこに生きていたんです。非常に太陽のことで明るくされているから。

●聖霊の内住の世界

「愛は律法の全きなり」

と。コリント前書13章、私が「曠愛新書」の第一巻に「福音の心臓」と書いたあれです。あの「愛は……」というはみんなキリストの愛、聖霊の愛のことです。手放しの愛ではない。「それが来れば、そのようにあり得る」と。

「⁴愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、⁵非礼を行わず、己の利を求めず、憤らず、人の悪を念わず、⁶不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、⁷凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事耐うるなり。」(コリント前13・4〜7)

と。「愛はおおよそ事、忍びぬき、耐えぬき、担いぬき、信じぬく」という。相手がどうであろうと。それだけの力は聖霊でなければ持っていない。我々も本当に、

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや生くるにあらず。キリストわがうちに在りて生き給うなり」

と。

「キリストの霊、霊のキリストが私の中で生きていける」

と。これが聖霊の内住の世界。「エン・クリスト」「キリストの中に」という、「クリストス・エン・エモイ」「キリストわがうちに」という世界です。



それがこの「律法の全き」ということです。律法を成就する。「すべし、すべからず」の世界ではない。「ぎるを得ない」世界になる。さっきの西郷南洲です。西郷南洲が好きだったのは、「言志録」のあの「ぎるを得ない」という言葉です。

「雲煙は已むを得るに聚り、

風雨は已むを得るに洩れ、

雷霆は已むを得るに震つ、

是に以て至誠の作用を観る可し。」

雷霆は鳴らざるを得ない。霧や雨は洩れざるを得ない。風は吹かざるを得ない。これが本当の「至誠」であると。「ぎるを得ない」というのはみんな自分が投げ出された世界であつて、「こうしようか、ああしようか」なんて、そんな選択している世界ではない。

学生は勉強せざるを得ない。勉強しなければ眠れない。それだけの気魄になつてこなければ、本当は勉強ではない。親しむことなんです。本の内容に親しむ。私は、「ドイツ語を勉強しろ」とは生徒に言わない。「君たちは、ドイツ語に親しめ」と言う。

「律法を全うするなり」と。もう、「すべし、すべからず」の世界ではない。キリストの愛は、敵をも愛する。敵をも救い上げてしまうと、こういうわけだ。これは聖霊が来ていけば、ハッキリその意識が出てくる。

私は人を何も恨まないね、どんなに言われても。何ともないんだ。気の毒になるだけのはなしだ。もうそういう相対的な妙な判断の次元から抜けてしまっているからね、この聖霊の世界に入っていると。

●愛とは死からの救い

9 それ『姦淫する勿れ、殺すなかれ、盗むなかれ、貪るなかれ』と云える

「我のほか何ものをも神とするなかれ」とか、「偶像を刻むなかれ」とか、「わが名をみだりにあぐるなかれ」とか、「安息日を聖く守るべし」とか、「父母を敬うべし」とかあるわけだ。あの律法の始めの方がここには書いてないけれども。これは律法の後の方だ。「殺すなかれ、姦淫するなかれ、盗むなかれ、貪るなかれ」と。これは民法だね、全部。対人関係のこと。人間の世界はこれをゴタゴタ、ゴタゴタやっているわけだ。

この他なお誠命ありとも『おのれの如く隣を愛すべし』という言の中にみな籠るなり。

「おのれの如く隣を愛せ」というのはレビ記19章17節にある。レビ記19章というのはちよつと大事なところですよ。

「エホバ、モーセに告げて言いたまわく。汝イスラエルの子孫の全会衆に告げてこれに言え、汝等宜しく聖あるべし、そは我エホバ汝らの神聖あればなり。」



「汝らの神は聖であるから、お前たちも聖であれ」と。これは大変なことだ。みんな聖人であれと。

17 汝心に汝の兄弟を憎むべからず、必ず汝の隣人を警戒むべし。彼の故によりて罪を身に受くる勿れ。18 汝仇をかえすべからず。汝の民の子孫に対して怨みを懐くべからず。己のごとく汝の隣人を愛すべし。我はエホバなり。」(レビ19・1…18)

そこに一番終りに、「我はエホバなり」という言葉があるでしょ。これを忘れては困るんだ。

「己のごとく汝の隣人を愛すべし。我はエホバなり。」

と。パウロはもうひとつ付け加えておいてくれたら良かったんだけど。

「私がお前の神ヤーヴェーである。だから、お前は——私はお前を愛しているだろう——その愛で隣人を愛せよ」

ということですよ。手放しでは、人間はなかなかダメなんだよ、正直。愛の反対は、すぐ妬み争いだ。仏教の世界では、この愛も否定してまって、もう無欲恬淡というところに行くような面もありますけれども、しかし、最後はやはり慈悲のことを語っているわけです。

「己のごとく」とあるから、

「では先ず、自分をひとつ愛そう。それから友人も愛そう。隣りも愛そう」

と、こう思っているはいかんですよ。「己を愛する」ことは人間の本能なんだね。その「己を愛する」ことは実は、本当は敵なんです、これは。

「己を憎む者でなければ、わが弟子となることはできない」

とキリストは言われた。人間の本能は、自己愛というものはエゴイズムだから。みんな持っている、誰でも例外なしに。

「己を愛するは悪の最たるものだ」と、南洲も言っている。

「自己愛の本能的な強さ、そいつを外に向けろ」

ということ。また、ある人は、

「そういうように愛することが本当に己を愛することだ」

なんて余計なことを言うが、そんな余計なことは言う必要ない。そういう意識だったらかえってダメです。やっぱり、それは犠牲的なものです。キリストの十字架に通ずる。だから、十字架道という。今は、そういった犠牲という言葉はあまりいい言葉ではないけれども、そういった犠牲的な、己を捨てた角度の友情、フレンドシップというものがこの若い人たちの中にあるかと言いたいわけだ。捨身の愛ということですよ。

「人その友のために己の命を棄つる。これより大いなる愛はなし」

と。万人は愛に飢えています。ですから、愛せられることは、

「汝の思うごとく人にもせよ」



というのは、

「一番我々が思うことは愛せられること、そのように人を愛せよ」と言うのと同じことだ。

我々は、人を相手にしなくても、人を当てにできなくても、神さまがキリストを通して、キリストによって、キリストを私のために与えて、そして、愛してくださいました。それより大なる愛はない。桁が違う。私たちはこのキリストの十字架の贖罪、罪の贖いと復活の生命を、聖霊をもって賜っている。もうこれ以上の愛はないですよ。我々を救ってしまっただから。いつ死んでも死なない者にしてくださったんだから。そういうふうに、神・キリストに圧倒的に愛されている。誰でもそうですよ。愛されているのに、どうかというと、「私はまだ愛されていません」

ではありませんよ。ただ受けとらないだけのはなしなんだ。

もう二千年前にキリストは十字架にかかって、贖罪を成し遂げた。ヘブル書9章、10章に書いてあるとおり。一回限りで成し遂げた。ただの過去完了でない。過去完了はいつも現在完了している。また未来完了している。そういうようにして、事実をもって我々に迫っておられるわけです。ペンテコステは二千年前に使徒たちが受けたばかりでない。今でもいつでもペンテコステであるわけです。それをなんだか、キリスト教の世界が、みんなただ過去の歴史みたいにして学んでいる。ダメだよ、それでは。現実を受けとらなかつたら、永遠の現在、というのはそのことです、終末的現在、というのは。

教育の根底は本当にそこになければダメなんです。まあたくさん、聖書の研究の本はあつたり、いろいろ、みんな一生懸命でやっているんだけど。問題は、教育は教師そのものの問題。それからもうひとつ言うならば、学校の制度を大改革しなければダメ。こんな「受験、受験」ではとてもダメです。

●もう終りが近いから

己を愛することがいかに本能であるか。そいつを捨てて、

「隣人を愛せよ。そは我エホバなり」

と。我はエホバであるからと。

「そは我キリストなり」

というわけです。

私は日常ね、びっこ引いて歩いてたり、目がおかしくなったりしている人を見ると、本当に語りかけて按手してあげたいと思うんだけど、相手がびっくりするから、よしてあげるけれどもね。

10 愛は隣りを害わず、この故に愛は律法の完全なり。

プレローマであると。さっきの8節は、



「人を愛するものは律法を全うするなり」

と。今度は、

「愛は律法の完全なり」

と。同じ言葉です。片一方は「愛するものは」と、もう片一方は「愛は」と言っているのは同じことです。「律法を満たすこと、止揚すること、終りとなすことなり」なんてなわけです。

11 なんじら時を知る故に、いよいよ然しかなすべし。

もう世は終りだから、神の国は近いから、終末的現在だから、いよいよ然しかなすべし。それを然しかすることが神の国を待つゆえんであるから、ということなのです。

今は眠りより覚むべき時なり。

この「時」は「カイロス」です。ある特別な時の転換期。今は霊的な眠りから覚めるべき時であると。ルカ伝12章に、

「16 また譬たとえを語りて言い給う『ある富める人、その畑豊かに実りたれば、17 心の中に議はかりて言う「われ如何いかにせん、我が作物を蔵おさめおく処なし」18 遂に言う「われ斯く為なさん、わが倉を毀こぼち、更に大なるものを建てて、其処にわが穀物および善き物をことごとく蔵めん。19 斯てわが霊魂たましひに言わん、霊魂よ、多年を過すごすに足る多くの善き物を貯たくわえたれば、安んぜよ、飲食せよ、樂しめよ」20 然るに神かれに「愚かなる者よ、今宵こよひなんじの霊魂とらるべし。然らば汝の備たえたる物は、誰がものとなるべきぞ」と言い給えり。21 己のためたからに財を貯たくわえ、神に対して富たまぬ者は、斯くのごとし』(ルカ12・16〜21)

とある。

「もう終りが近いから、みんな、すべきことをしておけ」

といったようなことが書いてあつて、そして終りに、

「今宵こよひなんじの霊魂とらるべし」

と。キリストも使徒たちもみな、神の国は近いという意識のもとにものを言ってますから。二千年たつてもまだ神の国は来ない。歴史の終りは来ない。けれども、いよいよもつて質的には迫っている。ノストラダムスの予言が当たるかもしれない。まあどうでもいいです、そんなことは。とにかく、神から離れて、世界がもし第三次戦争、第三の災いが来たらお終いだ。20世紀は二つの大きな戦争をしたが、第二次戦争が来たらお終いだものな。何だつて、人間は互いに愛さないで、互いに殺そうとしているかと。人類というのは救い難きものです。もう万人はこれ宗教を要する。お釈迦さんやキリストが出てきたのはそのためなんだ。

しかし、それほど深刻な内容を我々一人びとりが持っているのに、宗教のことはそつちのけで、魂の問題はそつちのけだ。それが一般ではないですか。一番根底の根つこの問題をそつちのけにしている。文化文明ではないですよ。文化文明の奥にこの福音がなかったら、



みんな引っくり返ってしまっただから。事実が、歴史がもう証明している。20世紀はもうギリギリのところに来てしまった。戦争ばかりでなくなつたつて、このままいけば、いろいろな公害現象や何やかで、いよいよ食うか食われるかとなると、ぶつ放すですよ。そうすると戦争になる。理屈も何もありません。そういった危機的な中で、一番大事な問題は魂の問題なんです。政治でも経済でも何でもありません。いわゆる教育でもありません。だから、青年諸君にしてこの福音を受けたら、

「よし、私はそのために命を捨ててまでもやるぞ」というくらい覚悟を決めてくださいよ。

●獅子と狼と豹

始めて信ぜし時よりも今は我らの救い近ければなり。

終末の再臨の時が近くなつた。

12夜ふけて日近づきぬ、

非常にパウロは迫つて言っているね。私も人生の夕暮れ時、日が暮れかかっているな、もう75歳なんだろうと。これから星空の下を歩く。あと15年か20年。星空の下を徹夜して歩いて、永遠の晨を迎えて、サヨナラと。そのつもりですから、私はこれからは。

然れば我ら暗黒の業をすてて光明の甲を著るべし。13昼のごとく正しく歩

て

「光の中」といえば、ヨハネ伝12章を開くかな、キリストが言っておられる。35節、

「35イエス言い給う『なお暫し光は汝らの中にあり、光のある間に歩みて暗黒に追及かれぬように為よ、暗き中を歩む者は往方を知らず。36光の子とならんために光のある間に光を信ぜよ』(ヨハネ12・35)

「光」とはキリストのことです。キリストの光を浴びて、生きろと。

「我は世の光なり。汝らは世の光なり」

と、私たちはそう言われているんだから。内側に聖霊を持たなかったら、光は出てこない。いいですか。絶対に負けないんですよ、このキリストの霊が来ると。もう弱音は吐きつこなしき。どんなことがあつても絶対に、いかなる環境運命にも。

「私の信仰はまだ初歩ですから」

ではないですよ。初歩もへつたくれもない。即刻、キリストを受けとれば、直ちにその世界です。

無条件です。あなた方は、なにか条件をつけて空気を吸ってますか。太陽の光を、条件つけて受けてますか。一番素晴らしいものは全部、無条件の世界です。どうして、そういうことをみんな躊躇しているんだらうかと思うんだよ。私自身はずいぶん長いこと躊躇したから申し訳ないけれども。どうぞ、私の過去の真似なんかしないでいただきたい。私は



信仰に入ったのは20歳だよな。今は74歳、54年経つ。1950年、46歳のときに聖霊を受けた。御霊を受けてからもう約30年たつかね、驚いたね。それにしてもダメだね(笑)。

宴楽・酔酒に、淫楽・好色に、争闘・嫉妬に歩むべきに非ず。¹⁴ただ汝ら主

イエス・キリストを衣よ、肉の欲のために備えすな。

この言葉は旧約聖書のエレミヤ記5章6節に似たような言葉が出ている。パウロはエレミヤをちよつと思ひ出したのかもしれない。

「⁶故に林よりいづる獅子は彼らを殺しアラバの狼はかれらを滅ぼし豹はその邑をねらう此処よりいづる者は皆裂かるべし。そはその罪おおくその背違はなはだしければなり。」(エレミヤ5:6)

ここに獅子と狼と豹の三匹の動物が出ている。「獅子」は「争闘・嫉妬」の争いの方、傲慢の象徴なんです。権力の方だ。権力意識。「狼」は貪り、貪婪の方です。「宴楽・酔酒」なんです。「豹」は「淫楽・好色」という肉欲の方。

「この三つの動物が現れてきて、山に登ろうと思ったが、とうとう登れなくなつてしまつた」

と、ダンテの『神曲』の始めの方に書いてある。そういう三つの動物がここに出ている。「宴楽・酔酒、淫楽・好色、争闘・嫉妬」と。だから、人間はどうにもこれに本当の意味で勝てない。部分的には勝てますよ。けれども、本当の意味では勝てない。それだから、ただキリストを着なかつたらどうにもならん。「キリストを着よ」という。

「肉の欲」というのは、人間の一切の、生れつき持っているところの欲が、「肉の欲」です。これは肉欲ではない。間違えては困る。そういった地上的なサルクス(肉)、そういった欲のために備えをするなど。

罪の中でも悪いのは、感情的な罪よりも、意志的な罪が悪い。「妬み・争い」というやつが一番悪い。争いの極致は戦争になる。争いは男が持ちやすい罪で、妬みは女性が持ちやすい罪。そういうことです。

●アウグスティヌスの『懺悔録』

この句を読むと思ひだすのは、アウグスティヌスの『懺悔録』です。アウグスティヌスがああ告白の中で、第8篇の終りで言っている言葉がある。

アウグスティヌス(354〜430)というのは、キリスト教の歴史で偉大な人物の第一等の中にどうしてもあげなければならぬ人です。あの頃の4世紀前後には、ヒエロニムス、アンブロシウス、アウグスティヌス、グレゴリウスの四人がローマンカトリックの偉大な人です。アウグスティヌスの先生にアンブロシウスがいた。アウグスティヌスは実に点々とする。アフリカのタガステという所に生れた人ですけれども。新プラトン主義をやつたり、マニ教にふけてみたり、その他なかなか情感の豊かな人だから、女性関係がうまくない。



そういうことで苦しんだりした。しかし、非常に真理に対する情熱の深い人です。哲学的、宗教的なあらゆる思索に彼の跡づけができるような内容がある。神学者としてもアウグスティヌスはキリスト教学で第一級です。アウグスティヌスがいたから、後のトマス・アクイナス(1225頃〜1274)も出てきたし、マルチン・ルター(1483〜1546)が出てきた。みんなアウグスティヌスを非常によく勉強した。そして、それをある意味で乗り越えるわけですけども。アウグスティヌスはパウロの書簡をよく読んだ。なんといつても、パウロは桁違いです。キリストを除いてはもうパウロの右に出る者はいない。これがパリサイの親玉だったんだからね。

アウグスティヌスが、『懺悔録』第8篇第12章で――これは中山昌樹さんの訳ですが――「これほど深き思いわが秘かなる底より、わが凡ての禍を悉く引き出だして、わが心の眼のまえに集めし時、恐ろしき嵐起り恐ろしき涙の驟雨を伴えり。非常に泣き伏したと。」

此を注ぎつくさんがため、我は起ちてアリビウスより離れたり。孤独は泣く業にふさわしと我感じたればなり。かくて我は、よし彼いたりとするも、我に重荷たることなき程遠くに退きたり。その時わが心は斯くの如くなりしが、彼はこれを識りたりき。そはわれ何事かを彼に語りたりと思えども、わが声音は涙にふさがれしと見え、かくて我は起ち上がれり。その時かれは我等の坐しおりし処に、いたく愕きて残れり。如何にしてかは知らざるも、われはある無花果の樹の下に身を投げ、わが涙の溢れいづるに任せれば、わが眼の涙は汝の喜みしたもう犠牲を、汝に向かいて溢れいでしめたりき。

詩篇51篇を思つてこういう言葉を言っている。「よみしたもう犠牲」というのは砕けたる魂のことです。

而して、真に言葉はこれと異なりしも、斯くの如き意味のことを、我はつぶさに汝に語れり。曰く「主よ、かくて汝は幾何時を経たもつや。主よ、かくて幾何時を経たもつや、

二度、こう言っているんです。

汝はとこしえに怒り給つや。われらの先祖のよこしまなる業を記念し給つ勿れ」と。この言葉は詩篇の66篇とか、79篇にあります。

そは我は此等のものに捉えられたるを覚ゆればなり。われは此等の悲しき言葉を放てり、「幾何時を経たもつや、幾何時を経たもつや。明日、またその明日までなりや。いつまでですか、というわけだ。

何故に今為し給わずや。何故に此時をわが不潔の終りたらしめ給わざるや」と。

われ此等のことを語り、わが心のいと苦しき悔恨のうちに泣きし時、見よ、孰れなりしや我は知らざるも、童また乙女の如き声、隣りの家より聞こえ、誦いつつ屢「取



りて読め、取りて読め」と繰返せり。

「取りて読め」はラテン語で「トレ・レゲ」という言葉です。

忽ち、わが貌は変われり。斯かる言葉を歌いて子供の為す、いかなる類の遊戯ありやと、いと熱心に考え始めたりしが、斯くの如きことを何処にも聞けりとは思ひ出だし得ざりき。是故にわが迸る涙を抑えて、我は起ちあがり、これぞ書を聞き、最初に我が見出だす章を読めとの、神の命令に外ならずと悟れり。そは人々が福音書を読みおりし時、図らずもアントニウスが入り来たり、彼等の読みたりし言葉を、恰も彼にむかいて語りうる勧告として受けしことを、われは聞きいたればなり。

「アントニウス」というのは最初の隠遁者で、アフリカに出た300年位の人で、修道院を最初に作った人です。

曰く「往きて汝の所有を売って貧しき者に施せ、さらば財宝を天に得ん。かつ来たりて我に従え」と。而してこの神託によりて、彼は直ちに汝に立ち帰れり。

これはアントニウスのことですよ。

ここに於て我は急ぎアリビウスの坐しおりし処に帰れり。そは我立ちて去りし時、使徒の書をここに残し置きたればなり。我これを取りて開き、わが眼の最初に落ちしところを読みたりき。曰く「宴樂、酔酒に、淫樂、好色に、争鬭、嫉妬に歩むべきにあらず、ただ主イエス・キリストを衣よ、肉の欲のために備えをする勿れ」と。

これはローマ書13章13節からあと、今読んだところ。これが最初にこのアウグスティヌスの目についたんです。

これより先きを我は読まんとせせず、また読むに及ばざりき。そは此節の終りに至るや、忽ち、謂わば、平安の光わが心のうちに浸り入り、疑惑の暗黒は全く消え去りたればなり。」

と。そういう言葉です。アウグスティヌスは自分の一番の苦しい罪との戦い、それにどうしても勝てなくて泣いていたわけだ。ずっと前に、彼がもつと若いときに、母モニカが牧師さんに聞いたことがある、「あの子は全くしょうがない」と。そうしたら、

「あなたの涙の子は必ず救われる時が来る」

ということを預言したそうです。「涙の子」というのは、「あなたが涙を流している」ということ。アウグスティヌスのお母さんは非常に祈りのお母さんだったものだから、お母さんの祈りでかなり助けられている。

大体、偉い人の、素晴らしい魂の人物のお母さんというのはみんな偉い。みんな質がいい。だから、日本では本当は女子教育が非常に大事なんだ。その次の人をつくるのね。いい加減な女子教育はできない。

ローマ書13章13節からのところは、もうほとんどアウグスティヌスを思い出さざるを得ないようなところなんです。アウグスティヌスはただこの言葉を読んで、すぐ回心してガ



ラリ変わった。正直、そうです。もちろん、それから聖霊をハッキリ受けたんでしょうけれども。それはその前にアントニウスのことを友人から聞いた。これが非常に彼を打った。「私もひとつそうになりたいな」と、本当に彼も思ったらしい。そういった後だから、それで「よし、私は」ということになったという。

その前に、『懺悔録』の第6編第6章のところに、

「路傍に酔って上機嫌の乞食を見て、自分にはあの乞食だけの幸福がないと嘆いた」

なんて書いてある。路傍に酔って上機嫌になっている乞食の姿を見て、「あれは実に幸福だな。自分にはそういった幸福がない」と。アウグステイヌスには恋人がいましたがね、その間に子どもができて、「アドルバートス」(神によって与えられたもの)という名前を付けた。だから、これを正式に結婚させてやればいいのに、そこがお母さんがちよつと理解がなかったね。お母さんがそれを捨てさせてしまったものだから。ちよつと頑固なところがある。あとその女性は独身を通した。それだけアウグステイヌスを思っていたんだよな。お母さんが、これと結婚しろなんていう女性を与えたんだが、彼はあと独身を通した。まあとにかく、人間はいろいろですね。それぞれ欠点だのいろいろありますけれども、そいつに打ち勝って本当に神の栄光を表すこと。誰だつて罪びとだから。あとは問題は、その人がそういういろいろな構造を持っていながら、そいつと戦いながら、本当に神の栄光を表したかどうかが問題です。

●キリストを受けとって栄光を表したか

藤井武先生は、再婚否定論者なんだ。あれは、先生の奥さんは立派だったからね。私のある友人が奥さんを亡くした。その友人が非常にしょげて、気の毒だったので、

「君、どうだね、君の奥さんの妹さんがいるが、妹さんと結婚したら、僕は、天界の奥さんは喜ぶと思うよ」

と言ったら、彼はびっくりしてね、

「小池先生は藤井先生の弟子だから再婚否定かと思つたら、そういうことを仰るか」

と。とうとうそれで結婚して、今は非常にうまくいつているわけです。それは天界のお姉さんが喜ぶと私は本当に思つたから。人の道はそれぞれです。内村鑑三先生は三度結婚している。しかし、先生はそれをもつて神の栄光を表した立派な人物です。

だから、「どういう在り方がどうである」ということではないんです。人それぞれみんな、再婚しようがしなかるうが、あるいは独身でいようが、三度結婚しようが、いろいろですよ、人間は。それぞれの各々の路みちがある。その人が歩かせられる路がある。アウグステイヌスだって、アッシジのフランシス(1182頃〜1226)だって、青年時代には脱線しているんだ。それぞれの路を通して結局は、神さまの栄光を本当に表した。神さまの栄光を本当に表すこと、それだけが問題だ。人間の相対的な判断、偉いの偉くないの、清いの清くない



いの、ではないですよ。そういうようなことで、偉い人にはよく隠し子がいるよ。エラスムス(1446頃〜1536)だつてそうだよ、あの当時の偉大なヒューマニストだ。その他いろいろある。そんなことが問題じゃない。みんな人間は罪びとに相違ないんだ。問題は、本当にキリストを受けとつて栄光を表したか。誰が天界に行くかは神だけが知っている。誰を天界のどこに置くかは神さまだけです。人の品定めはいらん。パウロもキリストに反抗して、実に彼は聖霊に逆らつていたわけだから。

「聖霊に逆らう罪は赦されない」

とまで言われている。それでキリストにやつつけられた。彼は人殺しも正直やっているものね。使徒行伝9章に書いてある。ステパノの殉教の死をよしとしたのがパウロだ。それはパウロはあとからこたえたよな。だから、

「我は罪びとの首かしら」

なんて言っている。けれども、「罪びとの首」になつたのはキリストですから。それで、パウロはどうですか。それはもう最大の使徒になつたでしょ。「過去がどうだ、現在がどうだ」ではない。全生涯を通していかに自分と戦つて、本当に神の栄光を表したか。それだけが問題です。

そういうわけで、ローマ書13章は、特に後半においてパウロが、いかに聖霊の愛は力ある愛であるか。自己に対する戦いの力、また、人助けのための力。それは力が上から来るんだから、仕方がない。私だつてこうやつて話していると力が来るんだから。どうぞ、そういうことで。まあ、聖書は読めば読むほど、限らない味が出てくるんです。

